



海路の賑わい : 当館所蔵の航路図付航路記(その3)

樋口, 元巳

(Citation)

海事博物館研究年報, 35:16-27

(Issue Date)

2007-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81005790>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005790>



海 路 の 賑 わ い

—当館所蔵の航路図付航路記（その3）—

樋 口 元 巳

卷子本の部

旅先の景観を語るのを聞くに、その土地を全く知らなければ想像も及ばぬ他人事となり、結局は自分の知っている景色に当てはめて納得したように見せる外はない。オノレ・ド・バルザックなどは別の目論見もあってか長々と土地誉めの描写を続ける事がある。そんな所は飛ばし読みに読む。絵図の説明も同じようなものである。宗教画のように一定の約束事に則るものならばまだしもかも知れぬ。それも約束事を知らなければ分からない訳である。前号（34号）の一枚物の航路図の記事については矢張予想に違わずあの説明文だけでは一人よがりになり読み手には想像するだに誠に困難だと指摘される。松木先生には、いづれ図版付きの解説文を書きましようと思われた。うまい方法も思い付かないまま引き続いて卷子形態の海路図を取り上げる。

取り上げるべき卷子本の海路図は次の通りである。

- (33) 「瀬戸内海航路図」(372)
- (34) 「瀬戸内海航路図」(3134)
- (35) 「瀬戸内略図 上ノ関から小倉まで航路図」
- (36) 「大坂ヨリ豊前小倉マデ海路図」(347)
- (37) 「大坂より西国へ海上航路絵図」(3135)
- (38) 「従大坂海路絵図」(357)
- (39) 「大坂より長崎海上航路図巻」(3153)
- (40) 「従大坂長崎迄海路図」(382)
- (41) 「海路絵図巻」(379)
- (42) 「大坂ヨリ江戸迄海上浦々島々磯瀬船懸場所針筋等絵図」2巻(346、349)
- (43) 「江戸より長崎道中図巻」(361)
- (44) 「従江戸府長崎迄海陸図」(382)
- (45) 「江戸より伊勢へ海上航路絵図」(3133)
- (46) 「江戸より若山福良、江戸より蝦夷浦々里程図巻」(348)
- (47) 「通船海上之図」5巻

前号で掲げた卷子本海路図の一覧表の誤りを訂正、順序も少し入れ替えた。(42)(47)以外はすべて1巻である。瀬戸内、大坂から長崎、江戸から長崎までなどと扱う対象は若干異なる事があってもそれぞれに共通する地域もある。大概の絵図に大きな差が有ろう筈もないので似たり寄ったりのものになる。表題も互いに類似の表現になるのは止むを得ない。表題に依って甲乙を区別するのが困難な場合もある。念の為に当博物館登録番号を記して備忘とする。表題の次に括弧内に示した算用数字がそれである。

(33)「瀬戸内海航路図」紙高40.5裡、全長198裡。

東の大坂川口、紀州御崎（岬）から西は豊前佐伯以北、熊本、天草、平戸の一部を含み肥前長崎までを描く。表題は外題僉に依るが新しく表装し直したもので元題僉の有無等については不明である。内題は無い。巻頭に里程一覧がある。里程は次のようである。

尼ヶ崎ヨリ兵庫江十三里 兵庫ヨリ明石江五里
明石ヨリ姫路江八里 姫路ヨリ室津江七里
室津ヨリ牛窓江十里 牛窓ヨリ下津井江十里
下津井ヨリ鞆津江十里 鞆津ヨリ蒲刈江二十里
蒲刈ヨリ津和嶋江八里 津和嶋ヨリ上関江十二里
上関ヨリ小倉江三里 小倉ヨリ長崎江五日路

以上である。各駅停車でなく急行並みの里程と考えられる。小倉から長崎までは陸路であろう。

とにかく瀬戸内は島が多すぎる。この絵図なども簡略なものにも拘らず紙高が高いのはこの島々を紙面に収めるためかと思われる程だ。大小の島々が実際以上と思われる位に細かく描き込まれてい、島の名称も詳しい。この絵図は中でも小豆島の地名が詳細である。その一方では陸上の描写は簡単で、川の名などさえ記入されていない。建造物、山岳等も全く描いていない。このような絵図もあるものだと思って見る。大坂川口も名称は多く省

略されている。地名に木津、テンボとあるのみである。大坂から地名を西に向かって進めば、ナルヲ、尼崎、イマヅ、フカエ、アヲキ、ウヲサキ、ミカゲ、トウト、東大石、西宮、ワキノハマ、カウベ、兵庫のようで、港々の地名はかなり細かく上げている。細かいようでありながら情報が正確でない所もあるようだ。

朱引の航路が描かれ、陸上は国別に色分けされる。処々に里程も記入されているが詳しくはない。国別に色分けする事は他にも例がある。成立時、作者共に不詳。

こんな風を書いてみた所で書いている本人でさえ記憶もぼやけてぼんやりしていて具体的に絵図が髣髴とするものではない。

瀬戸内などは情報がよく行き渡っていて絵図を描く際に若干の違いの生ずる事はあってもそれぞれの絵図が個性的であるというものではない。又そのようなものであっては困るのである。大坂川口の描写なども、道頓堀以下の堀や難波橋等の大橋以下を細かく丁寧に描いている絵図もあれば、逆に全く省略して簡単に描いているものもある。時代の差というものでないらしい。「摂津大坂図鑑綱目大成」のような詳細な市街図が宝永3年(1707)には既に刊行されている。情報がそんなに得難いものではない時代になって来ているのである。川口を丁寧に描いている絵図は全体的に丁寧に描いている。逆に簡略なものは各地の海岸線なども大雑把な事がある。

海路図は地図を描いているのではなく、まさしく絵図を描いているのである。淡路島なども絵図によっては海岸線の線さえ僅かで、山並や松並の重なりで済ましてしまうものもある。

なお、地理的概念や諸国案内等の情報の普及という点では思いの外早くから資料は整えられている。幕府撰の国絵図に正保、元禄、天保のものがあり、正保の国絵図が殊に勝れているとされる。このようなものでさえが筆写されて外部に洩れる事があったという。刊行本は地域的にも多くは限られ、部数も現代に比較すれば多いものではなく、又一般に高価なものであるから、誰でもが購入し得るとは云えない。刊本の写本が幾つも残っている。そういう事があるとしても地図や名所案内記や買物調法記やの類が次々と出版されるのには、それだけの購買力が背景にあるものと推測される

のである。

刊本に限ってみれば、日本全国図は寛文6年(1666)には「日本分形図」が早くも出されており、貞享4年(1687)には石川流宣撰「本朝図鑑綱目」の如き各種の情報を盛って賑やかな絵図も出版されている。長久保赤水の「改正日本輿地路程全図」は安永8年(1780)の事である。それ以前にも既に各種の絵図、図鑑、細見記等と名付けられるものが出版されていたのである。貞享4年(1687)には「西国船路道中記」が陸路の案内記、道中記、細見記類に並行するようにして出版されている。

(34)「瀬戸内海航路図」 紙高78匁、全長820匁。

表題は外題僉に従ったもので、内題は「從筑紫至摂州坂城舟路之図」というのである。巻末に「安政四(1857)丁巳六月日 為品川茂卿右田梧軒写」とある。品川茂卿の為に右田梧軒写すとしても読むのであろうか。いずれも武士と思われ、あるいは筑紫近辺の人かとも思われる。

紙高が高いのは裏打の仕方が幅広になっている結果で、元々は紙を継ぎ足して描いた部分を折り込んでいたものを広げて表装しているのである。78匁はその最大幅の部分である。

西は筑前と肥前との境から東は紀州加田、大坂川口までで、四国の瀬戸内側を描く。大振りのゆったりとした描き方で、海岸線も丁寧に描かれている。海は青、陸は黄に彩色され、城、社寺(赤)、松並(緑)、山並、人家が描かれる。

大坂川口には木津川、安治川、天保山の名が見え、遠く平安城まで川が上っている。摂津は山々の名称、地名が他の地に比べて詳しく、字名まで記入する所もある。

(35)「瀬戸内略図」 上ノ関から小倉まで航路図」(仮題) 紙高25匁、全長207匁。

東は室津、上ノ関辺から、西は小倉、ヤマガノミサキ辺までの限られた地域の簡略な絵図である。里程、航路が簡単に書き記されている。簡略な絵図とはいえながら、洲、瀬戸、ハエ(暗礁)、船懸り場、燈籠、番所が記入される。海中の石は朱で点々と示され、「リウガクチヒシタニトラズ」「ジカタイシヲ、シ」(三田尻沖ムカフノシマ)などの具体的な注記も見える。この絵図が実用され

たものか否かは別にしても実用的であろうとした事は奥書からも分かる。即ち「右者享保十七子年記之有候処、虫損出来いたし候ニ付此節写替候、已後右海上致通路候ハゞ、能心ヲ付、湊并はへ嶋等存寄有之者書かへ可申事、嘉永五子年季夏日児玉英之助重長写之」とある。享保17年(1732)から嘉永5年(1852)までで120年になる。

半紙大の薄葉紙を継ぎ合わせたほぼ墨一色の短いものである。巻頭部分は半折分しかない。このような事は一般的ではないので巻頭部分の前半が切り取られたものかとも思ったが、絵図は完結しているように見える。

この卷子は表紙に模造皮革を用い、紙の継ぎ目にセロテープ様のものを用いるという杜撰な装幀の仕方である。裏打もしていない。ちょっと不可思議なものであるが不思議に本文部分に傷みはない。これが嘉永5年写のものという保証もない。表題は内容から仮に付したものである。

(36)「大坂ヨリ豊前小倉迄海路図」 紙高27糎、全長180糎。

表題は表紙に直に書付られているものに依る。本文とは別筆のように見える。内容は題名通り大坂川口から小倉までの海路図である。四国は瀬戸内側のみだが、宇和島が詳細に描かれている。紀州は和歌山より北、九州は宇和島の対岸、佐賀ノ関辺より北を収める。

大坂川口には天満、福島、テンボ、中ノシマ、今テンボ、木津、天王寺、住吉の名が見え、今テンボが珍しい。木津川、安治川の名もある。安治川から朱引の航路が3本出ている。尼崎、和田岬へ直行する航路、紀伊加田へ向かう航路である。絵図の上部に断片的に里程が掲げられるが、これは陸路の里程と思われるものである。「中国路 大坂三リ尼ヶサキ 二リ西宮 一里大木(青木) 一リミカゲ 一リワキノハマ 二リ兵庫 二リス マ (中略) 小郡二リ半山中 二リ半舟木 一リ八丁朝市 二リ七八丁吉田 三リ長府 二リ下ノ関」の如く細かい。

絵図は上手とは云えぬものの丁寧に描かれてい、島や港やの地名もかなり細かく記入されている。やや虫損があるのが惜しい。大坂川口から西に地名等を拾うと、尼崎、西ノ宮、ウブラ、アシヤ、フク井(深江か)、ヲ、ギ、ヲイ(大石か)、ミカ

ゲ、ヂナ、ワキノハマ、花グマ、カウベのようで、写し誤りかと思われる所もある。楠公墓があり、鉄拐山に鎧懸松が記されているなど細かい所がある。

航路上の注記には「ミノシマ 瀬アリ」(曾根沖)「イエシマ 舟カ、リヨシ 北風悪し瀬あり」(家島)のような記事が若干ながらある。又、四国高松に矢クリ嶽が大きく描かれ、「矢操嶺頂上十帖數位、平地三所二有、蔵王権現宮アリ、必行ベカラズ、壇ノ浦ヨリ半里」などと見えるのは独自の記事かと思われる。又、「金毘羅社江多度津ヨリ三里、御山ノ下ニ茶屋アリ、止宿ニモヨシ、夜中ニテモ参詣苦シカラズ」ともある。

なお、航路図では城の絵は大方付き物であるが、ここでは尼崎松平遠江侯四万石、岸和田岡部内膳侯五万三千石と藩主、石高が記入されている。道中記などに倣ったものであろうか。時代、作者ともに不詳である。

(37)「大坂ヨリ西国へ海上船路絵図」 紙高29糎(最長部75糎)、全長378糎。

大坂、紀州雑賀崎辺から、西は豊前ワクノ御崎、山ガノ御崎辺までの瀬戸内航路図である。大坂川口は木津口、三間や、伝甫の名を記すのみで、図も簡略である。海は淡青、陸は黄と色分けされている。陸上には城、社寺等その他目印になるものをも含めて一切描かれていないのがかえって珍しい。海上に航海上の注意事項が「地方アサシ 東風ニ吉」などのように所々記入されている。このような記事が訂正した貼紙を付している所が一箇所ある。部分的に修正したものが清書されずに残ったものかと思われるが、絵図の作製上の機微を伝えるものかも知れない。下絵とも思われない。

この絵図の特異な点の一つは堺の浪除けが巨大に描かれている事である。「橋ノ内五十間橋外七十間長百二十間」とある。鍵形に築かれた石垣に陸上から橋が架けられている。

絵図上に記入されている里程は全体に詳しいものであるが、それとは別に巻首に里程一覧がある。総てを掲げる余裕はないので一部を参考に上げてみる。

大坂より長門国下ノ関江海上百三拾八里半

阿波国徳島より下ノ関へ百拾九里

同所より奥州ノ果たなぶ舟路北へ廻り六百三拾

九里（右の同所というのは大坂の事であろう）
同所より肥前長崎へ海上式百七里

（中略）

同所より江戸へ船路式百廿六里

同所より土佐高知山へ（欠文）但かち道

以上のような。中略部分に見られる地名は次の通りである。

嶋原 大村 平戸 松浦 名護屋 唐津 五嶋
天草留岡 熊本 壱岐 対馬 高麗釜山 大明は
くちう 福岡 小倉 中津 鶴崎 籠崎 松山
今治 高松 友（鞆） 福山 笠岡 岡山 姫路
室 明石 境 須本 岩屋 和歌山

〔38〕「従大坂海路絵図」 紙高13糎、全長442糎。

大坂から唐津までの海路図である。13糎の天地しかない狭い画面であるが細密に美しく丁寧に描かれている。島嶼、瀬、陸上は白抜きで、海上は青色に彩色されている。陸上には城、寺社、山々、松並、人家が描かれる。

絵図の処々に台形また三角形の空白部分があり、その真中を谷折りにして左右の端と端とをぴったり合わせると屈曲した地形が復元されるように工夫されている。凹凸の甚だしい場合は上下に継紙をして描く方法もよく用いられるが、この卷子のように横に横にと描きながら平面の紙を動かす事で処理する方法もあって頻用せられた。

この空白部分を利用して里程を上げている。「大坂川口伝法 尼崎二里 鳴尾崎一里 西宮一里 青木一里 ミカゲ一里 脇濱一里 建部一里 兵庫一里 一ノ谷二里 雁崎一里 明石二里」のようである。

絵図は本州、四国の瀬戸内側、九州北部の海岸部が描かれる。大坂川口は東西横堀、道頓堀以下の各堀や堂島等に至るまで詳細に描く。九条、茨住吉、大佛シマ、宇治川、キス（木津）川の名が見える。国々の城に藩主名と石高とを記す。唐津城水野左近将監の如く石高の省略される所もある。

航海上の諸注意事項の記事も少なくない。「磯近ク来事悪シ」（周防末島） 「此山ノ峯見ヲ付」（長門本山） 「上ヨリ下ノ関ニ来掛ル時ハ本山ヲ真艦ニ見、西ノ方ニ当ル、但風ニヨリテ酉戌ノ間又ハ戌ノ方ニ心持アリ」（壇浦） 「カネ崎瀬戸見合様同断口伝アリ、北ノ島ヨリ三丁ホド沖ニ

小瀬戸アリ、百石以下ノ船往来」（鐘崎）など具体的な内容である。

この卷子は現状では巻頭に唐津があって奥に大坂が来るように仕立てられている。文字の向きも上下逆さになっている。同種卷子の一般的在り方からすれば大坂が巻頭になる。そうすれば文字も素直に見えるようになる。装幀する際に順逆を誤ったのではないと思われる。

この小振りの卷子は現在同じような規模の他の卷子2本「大坂より釜山まで難所記録」及び「江戸初期造船並船具図説」の外題を付せられたものと共に桐箱に一括収納されている。外題の筆跡は3本とも同筆と思われる。装幀はいずれも異なり本文の筆跡は各々異なっている。紙質も違っている。これら3本は互いに関連があるというのではなく、偶々大きさ、内容のよく似通っていると見られた卷子を後人が一括して保存したものではあるまいか。

「大坂より釜山まで難所記録」は「舟之書」と「乗前之書」との2部から成る。巻首に本文とは別筆の付箋があり「舟打立様并入用道具大坂川口より対馬御城にわの浦より長せんふざんかいまで道法委細書」と記す。恐らくこれが正解で、対馬藩の人の記録なのであろう。

「舟之書」は大小船の規模と船道具寸法等の記事を主とし、「乗前之書」は大坂から対馬まで、対馬から釜山までの海域の湊及び瀬の有無を主とした難所記録である。「乗前之書」中の下関の瀬戸の記事に、太閤様御座船を船頭が扱いかねて、ために切腹した話を載せる。「舟之書」中に千石舟の人数に80人とあるのを見ると、商船ではなく大名の御座船の記事かと思われる。

「江戸初期造船並船具図説」はこの題名自体が新しいものである事は明らかで、実に良い加減な名付け方をしたものである。中味は水軍伝書の一で、能島流水軍の書などに見えるものである。軍船各種、水戦用武具を載せたものであって、造船の書、船具の書ではない。

海路図が大坂から唐津までというのがいかにも中途半端である。水軍の書、釜山浦、唐津名護屋城、太閤というので何やら一まとまりになると思っ

〔39〕「大坂より長崎海上航路図巻」 紙高40糎、

全長835.5裡。

大坂川口から長崎、平戸までの航路図である。奥に「右此図者肥之前州平戸大守松浦姓鎮信公命家臣船長数輩相伴 津々湊々漂泊問尋之 以及三年成功云云 然旧臣前河氏得写之所持 予惻望而写焉干時宝永三丙戌春（1706） 野嶋順智筆記之 西河氏良邑（花押）」とあるので成立の事情はほぼ明らかである。原本の写しの写しである（その又写しという事もあり得る）。丁寧に描かれていて、原本とほぼ同じものと考えてよいと思われる。

描かれているのは瀬戸内の沿岸部、肥前の海岸部で、四国は松山を含む内海側、九州は豊前中津辺から北、玄界灘、長崎、平戸までである。長崎から唐船路筋が示され唐船が浮かんでいる。五嶋舟路、壱岐対馬舟路も指示されている。

長大な絵図である。海は淡青色、陸は淡黄色で色分けされ、瀬戸内の島々は詳細に描かれると共にいずれも実際以上に大きく扱われている。海路はやや詳しく朱引で記入される。一方では大坂川口の描写はあっけなく簡単に済ましている。橋も架からず、川の名さえ省略されている。川口の地名に木津、寺嶋、中ノ島、三げん屋、難波、でんば、川口がある。これはこれで実際の記述とも思える。安治川、尻無川、木津川に相当する川口から3本の朱引の航路が出ていて、尼崎から西へ行く沿岸航路、兵庫和田岬への直行航路、紀州に下る航路に分かれる。

大坂川口の沖に大名船が数艘描かれている。船印が鮮明である。平戸松浦藩の船の見当らないのがよく分からない。伊予松山松平讃岐守、筑後久留米有馬玄蕃頭、日向佐土原島津但馬守、日向飯肥伊藤修理亮らのものであるだろうか。絵は達者なもので見ていて飽きない。

巻首下部に絵図に用いる符牒の説明がある。紫や黄やで色分けして、見え瀬、かくれ瀬、すか、道筋を描いている。説明はごく簡単。この卷子独自の情報とも思われない。船路に沿って里程も記入されている。「川口より兵庫迄十里」「兵庫より明石迄五里」のようである。「大坂より長崎まで船路合式百拾七里」とある。

大坂川口から西に沿岸の地名等を拾えば、あまが崎、だうのわき、なるみ、今津、えだ、西宮、あや、いばら住吉、ふか井、あふぎ、おいし、み

かげ、しない、わきのはま、はなくま、まや山、正成塚、兵庫、和田御崎、こまがばやし、須磨、一ノ谷、あつもり塚（以下省略）のようで、古跡、社寺等もある。現在とは異なる呼称も見える。

(40)「従大坂長崎迄海路図」 紙高27裡、全長655.5裡。

表題は内題に依る。「大坂従り長崎まで」というものである。巻頭に詳細な里程表がある。絵図は天地に継紙をする事もなく、又空白部分を設けて合印を合わせる事によって地形の屈曲をうまく処理する工夫もせず、横1枚に左に左にと描いている。刊本の道中記、細見記には横に横にとばかり描いたもの、時には双六のように回転しているものがあっても驚かない。安永4年（1857）刊の「大日本道中行程細見記大全」などは横長に描いた典型である。この絵図も紀伊、淡路、長崎、平戸すべて、実際の地形が凸凹している所を横に伸ばして描いているのである。同時に島嶼、岬等が誇張されて大きく又突出して表現されている。現実的な事を考えればこのような形でもよい事になる。海の道は真直ぐ進んで行くものであるし、島や岬は目立つものである。

大坂は城、天満天神、天王寺と共に東西横堀、江戸堀等が細見図の如く描かれている。先の「従大坂海路絵図」に似たものである。一方では川の名が安治川のみで澄ましている。川口にはテラシマ、エノコシマ、九条嶋、三間屋、ナンバシマ、ツモリ新地が描かれていて細かい。安治川口、木津川口から朱引の航路が出ている。終点は長崎の出島である。大坂川口を南に辿れば、木津村、ナンバ村、勝間村、住吉、大和川がある。ここもかなり細かく地名を上げている。この辺りから絵図は横に横にと描かれる。朱引の航路の各末端に江戸大路筋、北国乗筋、壱州航路、唐船筋が指示される。

長崎近辺の地名等も他の航路絵図に比べると具体的で細かく、陸上の道中記の記述に似ている。出嶋、新蔵地、西屋舗、立山屋舗などである。高札の様なものが幾つか描かれているのも目立つ。

巻首の里程表をそっくり引く必要もなからうから地名のみを上げておく。

大坂 尼崎 西宮 兵庫 須磨 明石 高砂
シカマト 室 シヤクシ 赤穂 大多布 タテ

牛窓 犬嶋 出崎 塩田原 日比 下津井 手嶋
犬嶋 鳩崎瀬戸 和布刈 ノウシ 只ノ海 カマ
刈 亀額 カロフト 津輪 由婦 カムロ アケ
ノ瀬 上ノ関 ザウシ 室津 笠田 深浦 スク
ト 馬嶋 ムカフ ハナガ 岩屋 丸尾 ナベ嶋
ウエノ御崎 本山 ヘサキ 田ノ浦 下ノ関 山
鹿ノ崎 地ノ嶋 相ノ嶋 玄海 姫嶋 相嶋 呼
子 馬渡嶋 平戸 青井崎 牛カ首 冬切 セツ
釜 瀬戸 スマウ 神楽嶋 福田 長崎

取り上げられている地名は以上のように最後に
「都合二百二拾里半 大坂ヨリ下関迄百三十三里
下関ヨリ平戸迄五十四里 平戸ヨリ長崎迄三十三
里半」とある。

(4)「海路絵図巻」(仮題) 紙高55糎、全長474
糎(巻首に32糎の遊紙有)。

表題について言えば、南波松太郎先生(「日本の
航路図」)の「南海航路図」とされているもの
である。この方が分かり易いものである。登録名
が上記のようになっているのでそちらで上げてお
く。

この絵図は堺市博物館蔵の6曲1双屏風「西海
航路図屏風」の右双、左双の下半分に相当する絵
柄のものである。当該の卷子は屏風の真半分では
なく下部分の6割程度を占めるものである。

絵図は大坂は住吉大社が上限で、大社のすぐ南
が堺である。大社の海を西に辿れば淡路は安乎
(あいが)の辺り、徳島は小鳴渡の辺りになる。
四国は阿波徳島の北端の極一部を欠く他は全て描
かれている。九州は豊前府内、肥後熊本が北限に
なる。九州南部は薩州棒(坊)の御岬を南端に南
部は全て絵図に描かれている。

堺市博物館の「西海航路図屏風」は、右双に大
坂川口、紀州加田を東端に瀬戸内と四国全島が描
かれる。左双には九州全島、平戸、五嶋、壱岐、
対馬が描かれる。四国、九州全島が描かれた航路
図である。航路は瀬戸内から九州へ、岩国沖合平
群島辺から佐賀関に至る航路、大坂川口から四国
南部への南海航路が朱引で記入されている。四国
から九州へという航路は宇和島沖から佐賀関への
瀬戸内のみ、佐賀関から下って九州へと向かうの
である。

屏風と卷子とは山並の精粗、文字色の差、注記
の多寡など少々相違は認められるものの同じ絵

柄の絵図である。注記などは卷子の方が詳しい。
屏風はそのようなものがそぐわないのであろうか。
それにしても朱引の航路が全く同じという訳では
ないのはどうした事なのだろう。

この卷子はよく描けた上出来のもので、画面も
落ち着いていながらも一方で華やかな所があつて
極上品といった趣のものである。本館蔵の航路図
巻の中でも逸品である。海上は一带に淡い黄色に
青く上塗りした風であり、陸上は黄色っぽい土色で
あつてその差はあまりはっきりしたものではない。
陸上には山並、松並木が程良く連なり、城、人家、
社寺が絵本の様に描かれる。村落に五、六軒、二、
三軒の家が並ぶ。赤、青、緑、黄と淡色ながら彩
り豊かである。山並は薄い焦茶色で縁取られる。
全体に赤っぽい。残念な事に主に松並木の緑青が
剥げ落ちて無惨である。又紙質のゆえか固くて折
れそうな不安がある。

図は鳥瞰図であるのは勿論だが、斜め上から見
た様に寸詰まりの感がある。マンテーニヤの横た
わるキリスト像の様である。四国、九州ともに狭
い画面に全体を収めようとするために左に捩れて
描かれている。堺市博物館の屏風は地名や里程を
金文字で描いて華やかである。金地の短冊も用い
ている。卷子の方は文字は黒と朱とのみである。
朱文字が華やいで見える。朱引の航路が縦横に延
びている。徳島と淡路との間の瀬に見える注記
「満潮ニハ頭少見ゆる広サ一町五反」などは卷子
独自の記事かも知れぬ。

早とちりが多くて申し訳ない事ながら、前号で
この絵図について、同じものが2部作られ一方は
屏風に一方は切断されて卷子に夫々仕立てられた
ものであろうなどと云った。果たしてそうなのだ
ろうか。

一時に2部作られた可能性もなくはないが、い
づれかが写しであるという事も成り立つ。どちら
が初めにあつたのかの決め手はないが、諸々の要
素から恐らく屏風が先にあつて卷子はその一部分、
つまり下部分の写しなのであろうと考えている。
この卷子が元々は山陽道、瀬戸内、九州北部の図
が屏風と同じようにあつて後に切断されたという
のではなく、初めから今見るようなものであつた
のではなからうか。土左の船路は恐ろしや。瀬戸
内の航路に比し南海航路は余程珍しいものである。
その部分のみを写したと考える訳である。絵柄は

異なるが、国立民族博物館蔵の「西国海路屏風」によく似た構図である。

それにしてもこの巻子は丸亀あたりが変である。本館蔵の6曲1双の航路絵図の屏風でも四国は左横にひしゃげて描かれていて南北が狭いものになっている。ひしゃげていてもそれなりに纏まっているものである。

堺市博物館の屏風では高松城のやや西方から乃生岬が出張り、やがて南に下って丸亀城に至る。三崎（筥の御崎）は目立って大きくは描かれていない。丸亀からゆるゆると下り気味に西行し今治城に至る。今治からゆっくりと北に向かって大角岬に至り、又南に下り松山城に至る。南海の高知城は丸亀城と今治との丁度中間地点辺りにある。

一方卷子では高松城から乃生岬、丸亀城までは屏風とほぼ同じような地形である。丸亀の西に至ってぐっと北に突出して筥の御崎が描かれる。三崎の西側部分が紙の継ぎ目に当たっているのであるが、三崎の西海岸部は輪郭線が途中で切れていて続かない。三崎の西にぬしま（六島か）が見えるが、これも半分ちょん切られたままである。陸上の山並も線がうまく続かない。南に下った所が観音寺である。観音寺の上部の海岸線も線が続いていない。朱引の航路もぎくしゃくしてくる。ここから西行すると今治城に至るものの、そのすぐ西に松山城が並んでいる。松山の西から岬が北に突出している。南の高知城は丸亀城のほぼ真下になっている。当然の事ながら、高知のひふりの辺りも同様に安定が悪い。

この部分は屏風と卷子との絵柄が大きく違う所で、卷子の方に何か手違いがあるらしいように思える。かと云ってある部分が抜け落ちているようにも見えない。1枚1枚の紙もほぼ95糎位で統一されていて切り取られた様子もない。写しとすれば独創的な写しというものだ。

この巻子は元々は上下にもう少し幅があったものが表装の際に切られたかも知れぬ。たとえば日向の「つるの御崎」の「る」の文字が半分切れているのである。下部がやや寸詰りになっている。上記の事もこんな事と繋がりがあのかかも知れない。

ここまでは堺市博物館蔵の航路図屏風との比較を専らにあれこれと想像してみたのである。驚く

べし、堺市博物館にはこの屏風の他に「南海道航路図」と仮に題されている航路図1巻がある。「堺市博物館優品図録第二集」「堺と三都」などの解説に依れば凡そ次のようなものである。成立は近世後半、大坂・堺・岸和田から四国の南、北、九州東南部を経て、鹿児島・坊津までの、主に南海道と西海道南部を描いており、屏風「西海航路図」の下半分と類似する。神戸商船大学に本図とはほぼ同一の図巻のある由が指摘されている。

実はその通りで、屏風よりもこの卷子と全く同じ物と云ってよい程に同じようなものなのであって、最初から卷子同士を話題にすべきものであったのである。右に触れておいた四国の半島や岬の形や城の在り処も同じ様なのである。但し、彩色などは甚だしく異なっている。又、その彩色は別にすれば全く同じ物かといえば、細かい所々になると違っている点もあるのである。

「堺と三都」の解説に、内容的にも図巻の方が屏風よりも詳しいように思えるが、製作時期の前後は分らないとある。上記の様に四国の形などからは卷子本同士に深い関連があり、或いは書写関係があるものかと思われる程である。最初の印象では同じ中味のものとは思えない位に彩色の相違している事他にも、堺市博物館のは巻子上部、図の最北端が本館蔵のものに比べるとやや低くなっている。この様な事もどのような事情でこうなっているのか判断し難い。屏風と卷子2本との前後関係等もどのように考えるのが自然か、少々考えあぐねている。こうして同じ図柄のものがあるという事は、他の航路図ででも類似の事がある事を思い出させて、航路図の成立事情の一端を垣間見させてくれている。

「南海道海路図」については、杉浦昭典先生の図録を下さりそれとなく教えて下さったので知る事が出来た。

(42)「大坂ヨリ江戸迄海上浦々島々磯瀬船懸場所針筋等絵図」 上巻 紙高28糎、全長666糎。下巻 紙高28糎、全長434糎。

前号で上記題名の卷子が2本あってほぼ同内容のものだという口振りで云ったのは大間違いで、2巻合わせて1品とすべきものである。南波先生、松木先生の既に説明されているのを見て思い出せず申し訳ございません。

大坂から江戸までの海上航路をそれぞれ伊良子岬辺を境に、上巻下巻に分かったもので、絵図はきれいに連続している。装幀は上巻が巻首に大坂が来て巻末に伊良子岬の半分まで、下巻は江戸が巻首にきて巻末に伊良子岬のもう半分までのようになっている。表題から大坂に始まるものを上巻とした。この上巻々首に里程一覧があつて、航路絵図が始まると天地が逆になっている。順逆に装幀したのかと云えば、矢張この状態で良いのだろう。里程一覧を逆さに書く事は、しかも巻頭では無かろうと思う。大坂から江戸まで絵図は一貫しているのであるが、大蛇のように長すぎるので最初から2巻に仕立てる積りであつたものかと思われる。

いづれも巻頭に「大坂ヨリ江戸迄海上浦々島々磯瀬船懸場所針筋等絵図写之」とある。下巻は「船掛」の文字を用いる。次いでこれもいづれにも「◎此印を寄テ可見」とある。平面な画面に凹凸のある地形を描くために紙を谷折りにして割印のように両側にある半円を合わせて◎を実現すると屈曲した地形が復元できるように工夫されている。

上巻々頭の里程一覧は次のようである。

海上都合式百四十里 内

大坂ヨリ紀州加田ノ瀬戸迄十八里

加田ノ瀬戸ヨリ熊野大島迄五十里

大嶋ヨリ志州大屋崎迄五十里

志州鳥羽ヨリ遠州御前崎迄五十里

御前ザキヨリ伊豆下田ナデ廿三里

下田ヨリ相州浦賀マデ三十五里

浦賀ヨリ江戸マデ十四里 〃

伊勢内海東西十八里南北廿五里 伊良子ノ瀬戸ヨリ桑名ヘ廿リ 遠州御前崎ヨリ駿河入江奥マデ凡三十里 伊勢ヨリ伊豆ノ下田マデ七十五リ 是ヲ遠州灘ト云

以上のような。里程の上げ方、里程そのものなど必ずしも他資料と一致するものでもない。

絵図は大坂城、尼崎城を最西端に、大物浦、伝法川、安治川口、尻無川、木津川口から紀伊を下って行く。但し絵は横に横にと描かれるのである。それでも半島の東側、鳥羽から名古屋までの辺りになると◎の合印で処理するのも諦めて紙2枚分を上部に継ぎ足して大屋崎から北に向かって描いている。そこが巻末になっているからだろうか。

伊良子岬が半分だけ描かれている。あと半分は下巻に続くのである。

上巻の紀州の上部欄外に寺社参詣記念の印がやたらに捺されている。和歌山城の上部の梵字印から始めて道成寺、紀三井寺、観音寺、熊野の薬王山東光寺、新宮、西国第一番札所、那智山、熊野那智、熊野妙法山などの参拝記念印である。他に例を知らないが、海上安全を祈願してこのような事をする習慣もあつたのであろうか。

絵図は書き慣れた筆太な線で海岸線がずいずいと描かれている。陸上には目当てとなるべきもの、先の大坂城、尼崎城は巻頭の例外で、他には城、社寺、山々等余計なものは一切描かない。只管海上を見詰めている。海上は淡青色で彩色され、磯や瀬やが絵で丁寧描かれている。

「加田ノ瀬戸ヨリ大崎ヘ巳ニ当ル、但シ沖ヘツイ島ヨリタクラ崎ヘ亥子ニ当ル」の如き針筋記事、「此磯（中略）走り込所也」の如き航海上の注記などが適宜に記入されている。

下巻は江戸城下、永代橋から始まり、シンホリ、南シンホリ、シン川、湊御殿、石川殿シマ、佃シマと続いている。品川の一ノ洲杭を初め浪除け、洲、磯等が丁寧に描かれている。東海道は勿論影も形も無い。海上航路ばかりである。

「此所船手ニテホツトノ洲ト云」（杉田濱沖）などのホツトノ洲は 24「自浪花東都海路図解」にも同じような記事がある。というよりも記事そのものが一致している。絵図もよく似ている。このような航海上の特記事項は目立って多い。「ナライ風ニ浦賀ヘ乗附此サキ泊リ燈明堂ヲ目当ニ走り込バ磯ヨリ間ヲ通不申。燈明堂ノ上ニモ有之」（観音崎）の如く極めて具体的な記述内容のものである。他にも「此江大南風ナゲニ（「自浪花東都海路図解」では「ナドニハ」とあり、これが正しい）内ヘ吹込時掛ル手前ニ而ハ綱二房アラケテ掛リ場近成候ハバ添廻リナク磯ヘ入申候」（江ノ嶋）、「此サキ島ノゴトク見ユル、満汐ニハ少シ切テ有ゴトク見ヘル」（小田原真鶴）などとい例を引き過ぎたがいづれも「自浪花東都海路図解」にそのまま見られるのである。南に一部分継ぎ紙をして八丈島、ユウツ島、泊江、鬼ヶ島を描くのも「自浪花東都海路図解」にそっくりである。

この巻子は「自浪花東都海路図解」と同じ資料に基づいて作製されたのかもしれぬ。あるいは当

館のこれとは云わないが「自浪花東都海路図解」に基づいて取捨選択して写したものかもしれぬ。このように考えるのが最も妥当である。

(43)「江戸より長崎道中図巻」 紙高36糎、全長879糎。

表題は外題に依るものである。内題はない。江戸から大坂までは東海道、大坂から長崎までは海路を描く。江戸城下の風光からすでに美しい。海辺に芦が生え、沖にかけて小舟や大船がもやっている。愛宕、神明、増上寺の描き方も上品で良い。「江戸ヨリ品川迄二里半」を皮切りに東海道が白くうねうねと続く。旅人の様々な姿が面白い。馬上の武家、挟箱や槍を持つ供人などと芸が細かい。御茶屋がある。品川、錦橋、大森を過ぎる。橋の上にも旅人がいる。川崎、御茶屋、かな川、ほどがや迄一里、一里を歩くのも愉快である。とほけた味が面白い。海上は青く澄み、舟を色々に浮かべる。山は淡く青く緑に、家は黄色く、社寺は赤と緑とで彩られ、橋も黄色に色付けされている。色彩も落ち着いていて又華やかである。見ていて最も楽しい絵図である。安野光雅の「旅の絵本」みたいだ。

やがて草津に到着。矢橋の渡しから琵琶湖に浮かんで京に入る。京からは大川を下って淀城を経て大坂川口に至る。川口には御城と共に三大橋も見えている。境、岸和田を南端に瀬戸内に向かう。でんぼから朱引の航路が出て海路に乗る。瀬戸内の島々は実際以上に大きく扱われていてうまいものである。

九州に至れば関権現、佐賀関、即ち杵築、中津辺から北が視野に入る。関権現からは陸路が再開し熊本、鶴戸に向かう。小倉から久留米に至る陸路も通じている。海上は玄界灘、平戸、長崎、五嶋までである。六角形に描かれた出島が大きく、橋も巨大である。鍋島番所、筑前番小屋が見える。五嶋の手前には唐船が浮かぶ。

遠く旅をした序でに次の文章も見て下さい。

「江戸から東海道、瀬戸内海、玄界灘を経て長崎に至る海陸道中を鳥瞰図式に描いている。途中名古屋から草津までは美濃路、中山道を併記する。遠くにかすむ山々、沿道の名所古跡、高く聳える天守閣、はては道ゆく旅人、船をこぐ船頭の姿まで克明に描かれており、居ながらにして旅の気分

を満喫させてくれる。おのおのの宿場や港の間の距離が一々記入されているが、その長さは一定の縮尺にしたがっているわけではない」

これはこのままでこの卷子「江戸より長崎道中図巻」の解説になっているが、そうではなくて「道中絵巻物」(2巻、江戸初期成立)についての海野一隆氏の解説の一部分である(「日本の古地図」南波松太郎・室賀信二・海野一隆編、創元社、昭和44年刊)。「道中絵巻物」と名付けられているこの卷子は、前半は「江戸ヨリ大坂迄宿付名所旧跡」、後半は「大坂ヨリ長崎迄船道」の2巻から成る。海野氏の解説に依れば、少なくとも江戸から大坂までは正保3年(1646)の所謂正保絵図が元になっていると云われているという。確定的な事としてはとても云えないけれども、当館所蔵のこの卷子はこの「道中絵巻物」が元になっているのではないかと推量している。遠近道印の「東海道分間絵図」(元禄3年、宝暦2年などの版がある)よりも余程似通っている。余計な事ながら数年前の思文閣の古書目録に紹介された「西国海路図巻」(1巻、江戸中期写、大坂から長崎迄里程入、紙高33糎、全長425糎)というものも、恐らく「道中絵巻物」あるいはそれと類似の作品を写したものであろう。

なおこの巻物も紙質が、殊に裏打の紙が硬いためか折り目が多く、取扱には嚴重な注意を要する。表紙の布も傷んだ。

(44)「従江府長崎迄海陸図」 紙高36糎、全長877糎。

表題は外題に依る。「海陸道中図巻」の呼称で紹介されている事もある。(44)「江戸より長崎道中図巻」と紛らわしい名称であるが、実はこれ、(43)と同じ内容のものなのである。こちらの方は前者に比較すれば旅人や舟やの姿が無く、地形の描き方も平面的な印象を与えるように思える。基本的には同じ絵柄である。お互いが書写関係にあるのか、同類の原本からこの2本が成立したのかの決め手はない。ややこしい所を省略して写したのかなという感じは強い。

(45)「江戸より伊勢へ海上船路絵図」(仮題) 紙高27.8糎(最大幅55糎)、全長447糎。

現在の状態は天地の余白をたっぷり取った巻

子で、硬質の紙で丁寧に裏打されている。少々硬いのがかえって扱い難い。元々は合印◎で屈曲した地形を復元する形式の絵図である。現状では◎の合印を合わせている部分と合わせずに元のまま離れている部分とが並存している。

絵図は海岸線のみを描く。主要な村落名の他、島嶼、磯、瀬、燈台などが詳細に記されていて、航法上の留意事項についても詳しい。海路は書かれていない。海は青、陸は黄で淡く彩色されている。松や村落や舟やが適宜描かれる。

永代橋を出立すると御船蔵、シンホリ、大川バタ、石川殿シマ、佃シマなどを通過する。東は利根川に至る。西に向かえば、品川一ノ洲、羽田洲、大師川原洲などが詳細である。所々に「品川船掛リヘ亥ニ当ル」の如く針筋が記入されている。

「船手ニ而ホツトノ洲と云」（横須賀浜沖）、「ナライノ風ニ浦賀へ乗ル時此崎泊リ燈明堂ヲ目当ニ走り候ハ、磯ヨリ間ヲカバヨヒ不申也 尤燈明堂之上ニも有之」（浦賀濱）と上げると、どこかでお会いしたなと思えば (42)「大坂ヨリ江戸迄海上浦々島々磯瀬船懸場所針筋等絵図」と同文なのである。遠州灘の説明も同様に記載されている。当然 (24)「自浪花東都海路図解」とも同記事である。絵図はそれぞれによく似通っている。

写しは墨一色であまり上手なものではない。絵図の伊豆国松崎の上部から遠州松カ崎の上部までが不自然に欠けて空白になっている。西は名古屋から四日市、津、松坂、五十五鈴川、鳥羽、合浦、元浦の辺りまでを収める。あるいは元はその先があったものかも知れない。末尾下部に朱で「志州大屋ヨリ豆州下田迄凡七十五里ト申 志州 三州 遠州 豆州四ヶ国遠江灘ト云」とある記事も置き方としては不自然である。

(46)「江戸より若山淡路福良、江戸より北海蝦夷浦々絵図」（仮題） 紙高26匁、全長923匁。

内題、外題ともに無く表題は内容を即物的に文字にしたに過ぎない。南波先生の「江戸より若山福良 江戸より北海道浦々里程図巻」と名付けられたものである。別に「日本海沿岸及本州日本海沿岸から本州北端」の呼称で紹介されている事もあるようで誠に紛らわしい。最初は別種のものが夫々あるものと思って探しあぐねた。日本海云々は不適当である。

航路絵図の下絵かと思われるもので、総て墨一色で粗々と描かれている。前半部は江戸から和歌山、淡路福良の辺りまで、1枚分遊紙があつて後半部は江戸から北海道渡島半島までを描く。2巻と云うべきものである。湾などの地形の屈曲は少々描いてはいるものの全体にはお構いなしで、紀州半島も総て横に並列的に続けて描いている。合印で合わすという方法も採らない。

江戸から和歌山までの前半部については、大師川原、羽根田濱の辺りは詳細で、所々の番所々在、燈明在所も記入されている。今切川口、白須賀濱、竹濱、寺が谷の辺りに至ると絵図の陸地が無くなってしまつて海ばかりの所もある。末尾も淡路福良、鳴戸、土佐泊の所で唐突に切れているといった感もある。

後半部は房総半島から始まる北海航路である。「だいとう崎 小濱より七里」「いぬぼうのはな 是ヨリだいとう迄拾八里」のように里程が記入されている。北海航路は湊の地名も珍しいものだが、「増補日本汐路之記」の江戸より奥州南部迄東廻りの記、「日本船路細見記」の東海船路道中記の後半とほとんどが重なるゆえ省略する。ゑぞの国として上がるもののみを次に示す。

えぞの国 塩くひ しのり濱 亀田濱 ゑさん
ヨリ十五里 たけかり湊 此間拾里 ゑとも嶋
此間拾五里 うす湊 高山 ゑさんの下ハ下もゑ
ぞと申殊に悪敷候乗り下り不申給候御心得可在候
以上のようなものである。絵も余り丁寧でないが、文字ものたくるような読み難いものである。

(47)「通船海上之図」 5巻 紙高38.6匁。

これは海路図ではないがそれに準ずるものとして扱っておく。(10)「海道中画譜」が机上で旅を追憶して楽しむ書として上梓されたのと同じ趣である。山陽道海岸の風景を真横から見て延々と描いたものである。同名の作品が上中下3巻と上下2巻との2種類があつて装幀も異なる。3巻の方は箱書に「通船海上之図中国」とあつて、黒塗りの立派な箱に納められている。2巻の方は桐箱に納められてい、箱書きはない。開けて見れば同じような絵ばかり。これについても前号で3巻本と2巻本との2種があるなど書いてしまい、一覧表にも別々に掲げるといふ愚かな事をしてしまった。よく調べもせずに思い込みでものを書くといふ

も無い間違いを平気で書いてしまう事になる。

結果は3巻本と2巻本とを合わせて5巻で完結するものとすべきものである。3巻本の方は昭和35年受入、2巻本の方は昭和42年受入で別々になっていたものである。いつの頃か別れてそれぞれ別の装幀を施され箱に納められたものなのであろう。

大振りの絵が連綿と展開していて所々に地名等を書き込んだ金紙を張り付けているばかりである。絵といっても海岸線を少し沖合から真横に眺めただけの単調なもので、山並、巖石、港町、河川、松並などが品良く綺麗に描かれている。どこを取っても同じようなもので、どこがどこでもよい。いづれも長尺で3巻本の上巻は1486匁、下巻は1617匁になる。他の巻々はこわくて計っていない。

錯簡もあるので、以下に貼紙の地名等（瀬とか遠しとかの注記も総て）を列挙してみる。

3巻本の上巻 クタ松 カサタ島 イヨ島 瀬 此所周防徳山（白砂青松の景） ツクモ島 佐島 馬島 此内ミタジリ ムカウ（人家、港入の舟の景） 笹島 末灘 松尾崎新湊トモ（松原の景） 床浪崎 本山崎 満珠 干珠 下之関（繁華の地） アカネ島

巻末に「探陽斎図（印）」とあり、当然その後も軸まで少々余裕がある。この署名と印とは3巻本については共通している。おかしい事に2巻本の奥にはこの署名と印とが見られない。その上巻末に余裕がなく、絵の終りが軸にくっついてしまっている。最終巻などは貼紙も1枚剥落していて奥が切れているような印象さえ受ける。

絵図の下之関は如何にも繁華の地で、停泊中の船々、人家、蔵、旅人、街道などが美しく描かれている。他の繁昌の地も同じような絵柄で、どこがどこであってもこれも不思議ではないという不思議な絵である。

3巻本の中巻 アシカ 此辺タ、ノミ海上ヨリ 遠 此間遠シ地方 高崎 此辺冬瀬戸 アバ島 吉邦 三津 小松原 小島 中之島 御手洗（繁華の地） ヲウチヤウ村 此辺ヲキトモ 伊月島 戸井島 此辺蒲刈 黒島 此辺隠戸ノ瀬戸 亀ノ首 源氏泊 カロフト

3巻本の下巻 備前ノ内 京之女郎 島 此辺 日比之瀬戸 日比 日比之内 渋谷 下モ村 下津井（繁華の地） 備前の内 此辺ヨリ手島灘

山伏島 下ミツ島 大室 呼松 此所白石前

以上3巻本の上中下巻である。2巻本も外題にそれぞれ上巻、下巻と記す。

2巻本の上巻 硫黄島 アケノシヤウ島 藤浪 ニナイ島 横島 室津 上之関之後 シダ村 此辺楯ガ濱 サゴ島 ゾウシ瀬 佐賀 久賀島 室積 此辺遠

2巻本の下巻 備前之内ムネキ 備前岡山 西大寺 東小御崎 新港 黒島 牛窓（繁華の地） 尻海 横島

以上の通りである。地名を並べて見れば分かるように3巻本中巻と2巻本上巻とが入れ替わっているのである。それも気が付かない位によく似た絵柄なのである。結構な事にこうして又5巻が一所に集まって完きものとなった。山陽道をよく知る人にはこの牧歌的な絵巻物も存分に楽しめるものになろう。考えてみれば大方の海路絵図も同じようなものだ。実際に航海用の地図として用いるものではなく、見て楽しむものという要素が強いのである。

一枚物の1つとして上げた「撰豊通船路程記」は安永2年（1773）に船中で写した旨の奥書がある簡単な絵図である。裏表紙に恐らく船中で用いたものであろうと思われる用具、飲食物等を列挙している。上中下3段に渡って上げているが、紙が擦れて読めない所がある。特に上段13項目は全く判読出来ない。中段14項目、下段8項目を適宜上げれば以下のようなようである。

風炉 火箭 せんじ茶 炭 茶わん 椀折敷 ふきん たらい 庖丁 柄杓 鍋大小 湯せん 盃 德利 蓋茶碗 小茶わん 甲鉢 酒壺樽

芝居や相撲を栈敷でお茶やお酒を飲みながら、お菓子や肴を食べながら見物するのと同じ事だ。そう言えば戦前の地方芝居では栈敷にかんてきまで用意していた。

流年一に何ぞ早き 3年も懸けてしまった。書誌的事項のみを一挙に上げて済ましておくべきであったかもしれないが、捨て石として見てもらえば十分です。

序でに前号、前々号の訂正追加をしておく。大航海時代の地図には羊皮紙の他に子牛皮も用いている。(24)「自浪花東都海路図解」については神戸海洋博物館に「自大坂至江戸航路絵図」と題す

る同一の図絵がある事を書き洩らしていた。神戸海洋博物館蔵のものは文化5年（1808）写、灘、御影の酒造家で使用されていたものという。大きさは269×363種である。細かい所々は本館蔵のものが書き込みが多いようである。卷子本の一覧表については本文中で正しておいた。右記正誤表を付しておく。

平成17年度 33号		
	誤	正
p.18 右—8、—9	向 <u>北</u>	向 <u>地</u>
p.20 右—2	便ある□の	便ある <u>も</u> の
平成18年度 34号		
	誤	正
p.10 右8	本 <u>部</u>	本 <u>都</u>
p.11 右13	余 <u>名</u> 港	余 <u>石</u> 港
p.15 左23	宮本清 <u>治</u>	宮本清 <u>海</u>
p.15 右—6	(<u>24</u>)	(<u>25</u>)
p.17 左—2	真 <u>辛</u> く	真 <u>幸</u> く